

## 第二回 医師 早川一光を語る会

日時：2020年6月13日（土）

テーマ：死にゆく人はさみしいのか？



早川一光 (1924~2018) 撮影 古川英美

### 第二回 医師 早川一光を語る会

テーマ「死にゆく人はさみしいのか？」

2020年6月13日(土)  
13:00~17:00

オンライン会議システム  
「Zoom」にて開催

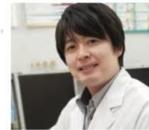
参加  
無料

事前申し込み  
(定員80名)



上野 千鶴子氏

社会学者、東京大学名誉教授、認定NPO法人ウィメンズアクションネットワーク(WAN)理事長、女性学、ジェンダー分野のバイオエタであり高齢者の介護問題にも関わっている。独居世帯率が増加する中で、在宅ひとり死も現実的になってきた。制度と医療が救えるもの、救えないものがある中で死にゆく人はさみしいのか。



岸上 仁氏

脳神経内科専門医、真宗大谷派受念寺副住職。旭会園田病院、脳神経リハビリ北大路病院にて神経難病、認知症などの脳神経内科診療を行う一方、大谷大学にてインド仏教の研究に携わる。医療現場の問いを仏教に確かめ、また仏教の学びを毎日の診療の中で確かめることを課題として取り組む。



西 智弘氏

川崎市立井田病院かわさき総合ケアセンターにて、腫瘍内科/緩和ケア/在宅ケアをトータルで診療。一般社団法人プラスケア代表理事。「暮らしの保健室」の運営を中心に、病気になっても安心して暮らせるまちづくり活動を行っている。がんを抱えても自分らしく生きたいという訴えに応えられるような緩和ケアを目指している。

京都西陣で在宅医療を中心に、「患者や家族が主人公」の医療、看護、介護を目指してきた医師、早川一光。自分自身が病気になった後は、今度は患者として、「誰のための医療なのか」を自分たちの課題として考えていく大切さを発信し続けました。早川一光の療養は、家族に囲まれ、定期的な医療・看護・介護サービスを受けながらの生活でしたが、「さみしい、道半ば」と最期まで言いつづけていました。死にゆく人はさみしいのでしょうか？そのさみしさはどこから生じるのでしょうか？「患者や家族が主人公」の医療においてさえ抱かれるその普遍的なさみしさに、患者も家族も社会も、どのようにとり組んでいけばよいのでしょうか。「語る会」でみなさまと考えたいと思います。

## プログラム

- |             |                         |
|-------------|-------------------------|
| 13:00       | 開会                      |
| 13:10～14:10 | 上野 千鶴子氏（社会学者）           |
| 14:10～14:15 | 休憩                      |
| 14:15～15:00 | 岸上 仁氏（脳神経内科専門医、真宗大谷派僧侶） |
| 15:00～15:45 | 西 智弘氏（腫瘍内科・緩和ケア医）       |
| 15:45～15:55 | 休憩                      |
| 15:55～17:00 | ディスカッション・質疑応答（進行：川村 雄次） |
| 17:00       | 閉会                      |

## お問い合わせ

立命館大学 衣笠総合研究機構 地域健康社会学研究センター 気付

「早川一光先生を語る会」事務局

〒603-8577 京都市北区等持院北町 56-1

メール:warajiisha@gmail.com FAX:075-466-3347

## 死にゆく人はさみしいか？

上野 千鶴子

『おひとりさまの最期』に「死にゆくひとはさみしいか？」という終章を置いたばかりに、講演を引き受けることになってしまった。早川さんとのご縁は最晩年。直接会いたいという希望を叶えていただき、闘病中のご自宅をお訪ねする機会を得た。

「思い残すことは？」とずけずけ訊いたわたしに、早川さんは「ある」と答えられた。

90代になってもひとは死が怖く、思い残すことがあり、さみしさに身をさいなまれる。

何人もの死に立ち会い、「ボケこそ救い」と言い、「在宅は天国」と言ってきたその早川さんが、家族に囲まれ、信頼できる主治医に恵まれ、手厚い看護・介護を在宅で受けながら、「こんなはずじゃなかった」とつぶやく。

それを早川さんは、身をもって示してくださった。ありがたいことと思う。

その姿から、わたしたちは何を学ぶことができるだろうか？宿題をいただいた思いである。

## 「さみしさ」とは何か

### -医療現場と仏教から問われること-

岸上 仁

「さみしい」その叫びを隠すことなく表された早川一光先生の姿に、敬いの念を抱きました。ともすれば避けてしまいがちな不安や孤独という問題に、ごまかすことなく真っ直ぐ向き合われた姿だと受け止めたからです。

私たちの身に降りかかる、さみしい、空しいという苦悩。それは老病死に直面している医療現場で常に目の当たりにします。それに向き合うというとき、私たちはどうしてもそれを直接的に取り除こうとします。しかし、老病死の苦悩ということは、人間にとって一体何が問題になっているのでしょうか。現に直面している方々の声から、自分自身は何が問われているのでしょうか。それを確かめずに向き合うといっても、どう向き合ったらいいかわかりません。

医学しか知らなかった私は、それを確かめるのが仏教の学びだと知りました。老病死の真っ直中を人間として生きるとはどういうことなのか。そのことを医療現場の声と仏教の言葉を通して考えたいと思います。

## 彼岸と此岸、そして3種類の死

西 智弘

「死にゆく人はさみしいのか」という問いは、彼岸に渡りゆくものと此岸に遺されるものの視点のズレを思わせる。死にゆくものは「根源的な」意味で言えば、さみしい。その視点のズレがまた、彼のさみしさを助長する。

ただし、さみしさは悪なのか、という別の問いを立てると、その見方はまた大きく変わる。さみしさは悪いもので、だから取り除く必要があるものだろうか。それは大いに「医師的な」目線であろう。そもそも、取り除けるものなのだろうか、否か。

さみしいとは、喪失に対する表現のひとつである。彼岸へは、全てを喪ってひとりで行かなければならない。では此岸に遺される私たちは、彼のためにできることは何もないのか。さみしさを取り除く、ということに注力する以外に。私は「3種類の死」という考えを用いて、私たちにできることを考えたい。さみしさを無くすという方へ向かわなくても、私たちにできることはあるのではないだろうか。